

# きんぎょがぶんが

## マルクス本を通読できた 例がない——という読者に

増田一夫 ますだ かずお / 東京大学教授



「マルクス〈取扱説明書〉」

ダニエル・ベンサイド=文 湯川順夫、中村富美子、星野秀明=訳  
 柘植書房新社  
 3360円 ISBN978-4-8068-0647-9

書評委員

石井千湖 倉本さおり  
 山田航 渡邊大輔

「ム ツシュー資本とマダム 地球が死の舞踏を舞う 不思議の世界」「貨幣が貨幣をつくるという幻想が支配する世界」、それはどうやって出来上がったのか。著者のダニエル・ベンサイド（一九四六—二〇一〇）は、「市場の全能性への信仰」に対する強力な解毒剤を提案する。

パリ近郊の、コミュニオンの記憶に忠実な労働者家庭。帽子職人となった末娘は、一九三二年、成年に達すると世界一周の冒険に旅立つ。だが最初に立ち寄ったアルジェリアにて、七歳で学校を辞めた（！）ユダヤ系男性と恋に落ち、その間に生まれたのが著者であった。息子は、フランス・トロツキズムの代表的

な理論家にして活動家、大学教授、オルタナティブ・グローバルリゼーション運動の重要な指導者となり、「ベンサ」の愛称で親しまれた。ベンサは言う。勝ち誇った新自由主義の論客たちは、「マルクスは死んだ」と宣言する。否。マルクスはエンゲルスとレーニンとスターリンという四重の横顔で描かれたマルクスが死んだにすぎない。教条主義の拠り所となった家父長的な像は後世の捏造であって、まずは困窮に耐え、ヨーロッパを移動しながら渾身で自分の時代を生き、考察したマルクスがいた。その彼が訴えたのは、行動としての闘いの必要性、そして認識の課題としての経済学批判であった。

本書は、「ソーシャル・キラー」探し、すなわち積み上げられてきた社会的連帯を破壊し、共通の富を奪い、食欲を美德へと押し上げる、青年エンゲルスが「殺人」であることを看破した犯罪の「犯人」探しでもある。読者は、そのモニタージュ写真作成に立ち会うことを求められる。資本に都合よく歪曲された言語と思想の分厚い層を穿つのは容易ではない。自由主義の自由とは規格化された商品を選択する自由。「個人の発展」は万人の万人に対する競争。よって、リスクと責任は全面的に個人が負うべきもの。倒錯した論理をあげき、「だれが剰余価値を盗んだのか」を調査してやっ

と、犯人の正体が明らかとなる。難解な『資本論』第三部をわずかの頁数で解説し、産業資本から銀行資本が独立する過程を示す著者の手際は鮮やかに尽きる。そこで行なわれるのは、「貨幣が貨幣をつくり」、社会的生産力が「労働ではなく資本に負っているように見えるようになった」手品の種明かしである。マルクスの語る「党」と後の官僚化された政党との違い、技術やエコロジーへの視点、歴史の必然ではなく政治行為の戦略的思想家としてのマルクスなど、「理論」と同時に「行動」の重要性を強調するさまは、大ベストセラールとなったS・エセルの『若者よ怒れ！』（明石書店、二〇一二年）にも通じる。リーマン・ショックから五年、痛みを忘れ、貨幣と国家へのかつてない信仰を生きた世界は、鋭い警鐘をそこに聞くべきだろう。すでにマルクスを知る読者は、アルチュセール、ネグリ、ホロウェイイとも違うマルクス像を発見できるはずだ。同じ著者の『二一世紀マルクス主義の模索』（柘植書房新社、一一年）はさらにくわしい。

硬直した社会主義に抗して、短期的利潤の追求によって未来を封ずる金融資本主義に抗して、「理論」とは可能性を開いたままにすることだ」と主張する本書は、ふんだんに風刺画を活用し、笑いへの可能性も開いたままにしている。マルクス（関連）の本を通読できた例がないという読者にこそ強く勧めたい。

題字/もとき理川 ※価格はすべて税込です。